

# 宗教者は価値観の見直しを

## 地域とよりよい関係探るべき

### 寺族女性と過疎地域寺院 シェンター平等な社会を目指して

名古屋大助教

横井 桃子

寺院には住職がいて、その住職には家族がいる、というのは読者にとって当たり前の感覚だろう。住職はその配偶者とともに寺院を切り盛りしながら地域に溶け込み、一般的な家庭と同様に子育てをして、次の世代へと寺院運営を継承する。世襲制の賛否はさておき、寺院の多くが住職とその家族によって運営され継承されている。

そうした家族運営のなかで住職と並んで檀家・信徒に対応しているのは言うまでもなく住職の配偶者である。そしてその存在を思い浮かべるとき、われわれはその人が女性であることを前提としていないだろうか。現に、住職の配偶者のことを例えば「寺庭婦人」「住職夫人」と呼称するとき、明確にジェンダーを固定してしまっているのである。浄土真宗における「坊守」もまた住職の配偶者のことを示すが、浄土真宗本願寺派では2008年まで坊守を「住職の妻」と定め、女性が担うものとされていた。

私はこの場で住職やその配偶者の男女比率の不均衡について議論するつもりはない。より注目すべきは、寺院の運営と地域コミュニティ

にわたる。これまで私が訪れた浄土真宗本願寺派寺院での話によれば、坊守の仕事は寺院境内の清掃や荘厳、参拝者や門信徒への対応や接待のみならず、僧籍を持つ坊守が法要や葬儀を執り行うケースも多い。寺院の責任役員ということで役員会議にも出席する。さらに自治会・町内会のイベントに参加したり子ども会や婦人会、地域福祉などの地域社会の役員を務め

る。つまり、地域住民である檀家が住職夫婦に対して地域貢献を期待するのと同時に、住職夫婦の側も檀家に寺院への協力を期待して地域の役員などを引き受けている。もちろん、何の見返りもなしに檀家や地域のためにたらこうと志す「聖職者」は多いだろう。しかし顔見知りばかりの小さな地域では、「おたがいさま」という共通の意識のもとで地域に貢献した結果、コミュニティが維持されていくという側面がある。こうした「おたがいさま」のサイクルの結

果、人々のつながりが強まり地域価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

のはたらきを正当に評価するということとは、当該の寺族女性たちがその役割を担うときに、不利益や不均衡が生じている可能性を見極めることなのである。先ほど紹介した地域で活躍する坊守たちの語りへ戻ろう。「おたがいさま」「持ちつ持たれつ」の意識で地域へ協力していた坊守のなかには、実のところ門信徒との付き合い方に相当の気づかいをしていられる者も多かった。「特定の人と仲良くしていると思われぬように、まんべんなくお付き合いするように気を付けている」。どんな人にも平等に接し、人間関係を潤滑にするはたらきを求められる坊守は、その役割ゆえ、地域内でプライベートかつ親密な人づきあいが自由でできないのである。「女性ゆえに」坊守であるがゆえに「こうした細やかな配慮が求められる、人づきあいの制限を受けるのである」、それはジェンダーによる不利益や不均衡が生じているのだと言わざるを得ない。

宗教関係者の中には、女性にしかできないことがある、と寺族女性の役割をある意味で好意的に評価する者もいる。しかし一方でその評価そのものが、寺族女性の役割を限定し、ひいては男性たちの役割をも排他的なものにしてしまっている。寺院運営を担い地域を支える宗教者の役割を性別によって固定することは、多様性の否定なのである。

また、女性にしかできないことはあまり多くなく、大抵は男性も女性もできることであることが多いため、育児を例にとってみても、育児が「女性にしかできないこと」

## 性別役割固定は多様性否定

### “女性ゆえの仕事”で不利益

出てこそ、宗教・宗教者の新しい価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

かねないこの言葉こそ、農山漁村地域における宗教と社会との関係性のリアリティが表れている。つまり、地域住民である檀家が住職夫婦に対して地域貢献を期待するのと同時に、住職夫婦の側も檀家に寺院への協力を期待して地域の役員などを引き受けている。もちろん、何の見返りもなしに檀家や地域のためにたらこうと志す「聖職者」は多いだろう。しかし顔見知りばかりの小さな地域では、「おたがいさま」という共通の意識のもとで地域に貢献した結果、コミュニティが維持されていくという側面がある。こうした「おたがいさま」のサイクルの結

果、人々のつながりが強まり地域価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

かねないこの言葉こそ、農山漁村地域における宗教と社会との関係性のリアリティが表れている。つまり、地域住民である檀家が住職夫婦に対して地域貢献を期待するのと同時に、住職夫婦の側も檀家に寺院への協力を期待して地域の役員などを引き受けている。もちろん、何の見返りもなしに檀家や地域のためにたらこうと志す「聖職者」は多いだろう。しかし顔見知りばかりの小さな地域では、「おたがいさま」という共通の意識のもとで地域に貢献した結果、コミュニティが維持されていくという側面がある。こうした「おたがいさま」のサイクルの結

果、人々のつながりが強まり地域価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

かねないこの言葉こそ、農山漁村地域における宗教と社会との関係性のリアリティが表れている。つまり、地域住民である檀家が住職夫婦に対して地域貢献を期待するのと同時に、住職夫婦の側も檀家に寺院への協力を期待して地域の役員などを引き受けている。もちろん、何の見返りもなしに檀家や地域のためにたらこうと志す「聖職者」は多いだろう。しかし顔見知りばかりの小さな地域では、「おたがいさま」という共通の意識のもとで地域に貢献した結果、コミュニティが維持されていくという側面がある。こうした「おたがいさま」のサイクルの結

果、人々のつながりが強まり地域価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

かねないこの言葉こそ、農山漁村地域における宗教と社会との関係性のリアリティが表れている。つまり、地域住民である檀家が住職夫婦に対して地域貢献を期待するのと同時に、住職夫婦の側も檀家に寺院への協力を期待して地域の役員などを引き受けている。もちろん、何の見返りもなしに檀家や地域のためにたらこうと志す「聖職者」は多いだろう。しかし顔見知りばかりの小さな地域では、「おたがいさま」という共通の意識のもとで地域に貢献した結果、コミュニティが維持されていくという側面がある。こうした「おたがいさま」のサイクルの結

果、人々のつながりが強まり地域価値を見出し、コミュニティの維持・発展につながりやすくなる動きが昨今さかんに見受けられる。「やっぱり、持ちつ持たれつだからね。坊守に、地域社会で役員を担うのはなぜか？」と尋ねた際、このような回答をいただいた。「お寺に来てもらおうと思うと、やはり地域のことにも協力しないといけないのだという。もし地域の活動に参加しなければ、「お寺は、お高くとまってる」と言われてしまうのである。とすれば坊守らしからぬと思われ

## 論

### 過疎地寺院問題

≪ 5 ≫



ゆい・もも 氏 1987年生まれ、鹿児島県出身。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(人間科学)。浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手、南山宗教文化研究所研究員を経て、現在、名古屋大助教。専門は宗教社会学。

### 仏教思想の根幹 平等理念に変革の力